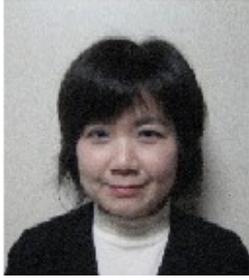


首藤 美香子
(Sutou Mikako)



お茶の水大学研究員

人文科学博士。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻修了
人文科学博士 (Ph.D.in Child Study,2001年)。2001年～2004年中国社会科学院近代
史研究所・客員研究員。元お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム拠点講師
(幼児教育分野の国際協力担当)。

専門は、子ども観の歴史・児童文化論・比較幼児教育学。特に、日本の子ども観
の転換期の構造を「出産・育児」に関する言説と実践の分析を通じ探究してきた。児
童学徒として、我々の子どもに対する日常の認識や態度、感受性の基底にある「子ど
も観」を掘り起こし省察すること、子どもの「問題」を歴史という時間軸、社会・文化とい
う空間軸のなかに置き直して多角的に検証すること、国際的な動向を視野に入れ、
日本の現状と比較しながら、学際的子ども研究の新しい方向性や現場の問題解決の
ための多様な選択肢を探ること、以上の三つの課題に取り組み、未来の「大人と子ど
も関係のあり方」を模索中である。

最近の業績:単著『近代的育児観への転換—啓蒙家三田谷啓と 1920 年代—』勁
草書房 2004 年(学位論文)、「<子ども>の視座の奪還—熊秉真『童年憶往—中国
孩子的歴史』考—」『比較家族史研究』第 18 号 2004 年、共著『児童文化』ななみ書
房 2006 年など。

日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

私たちの子ども観・発達観・教育観は、社会・文化のなかで形成され、歴史的に変容するものである。今
回は、中国の子ども観・発達観・教育観がどのようなものであったか、伝統小児医学、科挙制度、儒教思想
や芸術など様々な資料から考察してみたい。こうした中国の子ども観の歴史を探求する試みは、子どもを
「教育と保護の対象とみなす近代的な子ども観」の脱構築につながるだけではなく、欧米とは異なる「アジア
の子ども観」を鮮明にしていく上で有意義であろう。また、中国から大きな影響を受けてきた日本の子ども観
と比較し、日本の子ども観の独自性や固有性を再発見していく契機ともなる。さらには、現代中国における
子どもの処遇(一人っ子政策とその影響)の特質と課題を歴史的な文脈の中で再検討する可能性も秘めてい
るだろう。

子ども観・発達観・教育観へのアプローチが、子どもの成長発達と生活環境のあり方を相対的批判的に検
証しようとする「子ども学」のひとつとなり、日中双方が、子どもの具体的な生き様を包括的に理解し、新しい
子ども—大人関係の気づき(築き)となることを願っている。

はじめに —黄遵憲、魯迅の日本の子どもへの関心—

(1)子ども観・発達観・教育観へのアプローチの意義と課題

(2)中国の子ども概念「子」「童」「幼」

(3)伝統小児医学による子どもの発達観(陰陽五行論「変蒸」)

(4)科挙制度下における子どもの教育(早期からの知識教育重視)

(5)儒教の遊びに対する対照的な見解(朱子学 VS.陽明学)と「遊ぶ子ども」の主題化(芸術)

まとめ —中国の子ども観の歴史が日本の子ども観の歴史、現代中国の子ども観に示唆するもの
とは—